

報告要旨（2006年10月7日）

アウクスブルクにおける再洗礼派の広まりと「ゲマインデ」—租税台帳分析を中心に—

早川朝子

再洗礼派とは、16世紀の宗教改革の経過の中で、生まれて間もない頃に受ける洗礼の有効性を疑問視し、信仰を自覚した成人として二度目の洗礼を受けた人々の総称である。実際に再洗礼派となった人々の数は、その影響が及んだ時期や地域全体からみると僅かであったにもかかわらず、皇帝をはじめとする時の統治権力より、既存の支配体制の転覆と統治者たる「お上」の根絶を企図する集団と理解されたため、迫害の対象となった。その中でも特に危険視されたのは、暴力的な終末論を展開したハンス・フートであった。フートによると、終末の神の審判の際に救われるべき真の信徒である再洗礼派も、神の戦士として、背神者、即ち「お上」や再洗礼派でない者たちの打ち殺しに加わるようになっていた。

では、このようなフートの終末の構想は、再洗礼派の仲間入りをした人々の間で広く共有されていたのであろうか。本報告はこのことの検討を、1520年代後半にフートが教えを説いていたことがあり、「南ドイツ最大の再洗礼派ゲマインデ」が形成されたとも言われている、アウクスブルクを対象に試みたものである。そのための主な史料は、1528年に同市当局に拘束された141名の信徒に対する審問の記録と1527年の租税台帳である。

まず審問の記録から浮かび上がるのは、市内の一般信徒たちがフートから直接教え導かれた形跡は窺えないが、終末の教えはフート以外の別のリーダーたちによって説かれていたということである。したがって、一部の信徒はフートの終末思想を間接的に聞いていたであろうが、それに対して彼らがどのような反応を示したのかは不明である。また審問の記録からは、共同募金箱の制度が機能しなかったことや、信徒間に貧富の差に起因する対立関係があったことなどが読みとれる。これらはいずれも、「ゲマインデ」内の結束力や一体感の希薄さを示していると言えよう。審問の記録は他にも様々なことを教えてくれるが、そこから、信徒たちがどのような意図のもとに二度目の洗礼を受けるに至ったのかを知ることは、僅かな例外を除いて難しい。市当局側の関心事ではなかったからである。

次いで租税台帳からは、再洗礼派が居住した世帯を合わせて92割り出すことができた。それらは43の徴税区に分散したことから、信徒たちの居住地が市内のある特定の箇所に集中したのではないことが明らかになった。また、再洗礼派の居住地が判明したことにより、信徒たちが集会を開いていた場所の特定も自ずと可能となる。再洗礼派は主として信徒個人の家を集まって、洗礼を授けたり、聖書を読んだりしていたことを、審問の記録が教えてくれるからである。そしてそのような個人の家41軒について、一軒ごとに、一度でも居合わせたことが史料上確認できる信徒の居住地を分析してみたところ、信徒どうしの交流のあり方に地域的な偏りがみられたことから、「ゲマインデ」内の結束力や一体感の希薄さがより一層明らかになった。

以上のように、再洗礼派研究に租税台帳を採り入れたことにより、信徒どうしの結合関係のより詳細な検討が可能となった。そしてその結果みえてきたのは、アウクスブルクの「ゲマインデ」の信徒たちが、フートの終末の教えを広く共有し「お上」の根絶を目指して一致団結していたとは考えにくい、という状況である。一般信徒の姿を探るには、再洗礼派となる理由といった内面を史料から直接知ることが困難なため、今後とも、都市生活などに現れる外面的状況に着目していかなくてはならないであろう。